

地学漫筆 No.1

Geologistの青春

(絵とも) くらた・のぶお

地学漫筆執筆に当って

地質ニュースに何かかるい読み物が欲しいという声は すでに久しく以前から聞かされている。水を中心にしてさらさらと書き流すことは そうむずかしいことではない といって それはどうも私の専門からいって 我田引水になりそうで 気がひけるし そうかといって 何人かの有志に書いてもらうとなると その相互の間に調整をとる自信がなくなる。そこで視野を広げて地学 あるいは地球科学の観点から取材していくとすれば かなり自由に誰にでも執筆が依頼できるし 何回か書いてそのあと誰か次の人にバトンタッチして 長く書きつづけることもできるように思う。そこであえて「地学漫筆」と題して 毎号そのときそのときの執筆にかかわる短文をのせていくこととした。私たちはこの「地学漫筆」によって 地球科学のなかに 新しいジャンルを開拓しようという野望をもっているわけではない。しかし率直にいうと 地球科学をもっと私たちの生活 身のまわりに 深い関係をもたせなければならないという 強い執念をもっている。『ぢしっがく』といわれたり やたらとたくさんな岩石や地層の名前を並べたてて 聞くしろうとを面食らわせることに終始し勝ちの私たちの世界から 一步でも脱出するために 私はここで書きたいことを書かせてもらおうと思う。もし幸いに それが地球科学における新しいジャンルを切り開く何かのきっかけになるならば それは『たいしたもうけもの』だと私は思う。かつて好評を博した「車窓展望」や「私たちの生活と地質」よりもっと軽いよみやすいものにこの「地学漫筆」を仕立てていきたいと考えている。ご愛読願いたい。



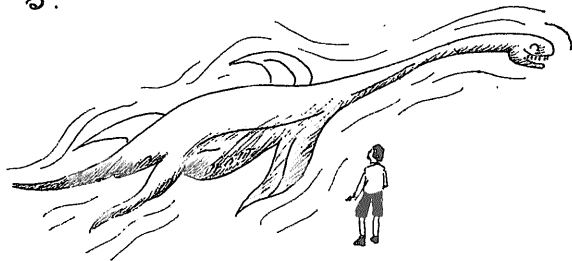
山の魅力が geologist への途をえらばせる

名刺やで名刺を刷るたびに 地質の研究というとずい分 地味なお仕事ですね…と主人にいわれる経験を私たちはもっている。地味な仕事であることを承知の上で 世の中のかげの力に甘んじて 私たちは山を歩き 水を調べ 産業の原動力となるいろいろの鉱石を探している…ということができよう。

いや そういってしまえばそれまでであろう。しかし 私たちはそこで少しは考えてみなければならないのじゃなからうかと思う。これだけの仕事をしていて 一体これでよいのかと 私たち地球科学者は自慰の世界から反省の途をたどって ……ほこりをもって臨める世界に 私たちは視野をひろげてみる必要があるのではないかと… 少なくとも私は考える。お隣の中国ではかって地質やさんが総理大臣にまでなっている。また別の国では 地学関係の官庁が でんと構えてわが通産省級の発言をしているというのに 私たちの国では 山への執念にとらわれた男たちが おのが興味のままに 山を歩き 火灯ころ人里に戻ってくる「一介の地質や」でしかない生活を繰り返している。たとえその背にするリュックザックには 化石や

鉱石がその日1日の収かくとして どっしりとつめ込まれてはいるにせよ 心豊かなはずの若い geologist はその胸中に「失われいく青春」を感じないわけにはいくまい。

学術としての地質学 その命ずるところはすこぶるきびしく その指向するところはきわめて高遠である。とはいえその学問のなかに私たちが捕われてしまつては元も子もなくなってしまう。私たちはその地球科学という学術のなから 私たちの生活に あるいは職場にちかに関連するものを導き入れることに はじめて「自然に学ぶもの」のほこりを感じるのではないだろうか。それをある人は 自分の作っている地質図が日本の国土のおいたちをときほぐす基本となつて やがてその上に築かれる新しい知識をうみだすのだといい またある別な人は セメントや鉄鋼業の原料となる石灰岩やドロマイトを調べて 私たちの生活に間接に貢献していると説明している。事実その通りである。しかし それと同時に 一般の人たちはその苦勞をしらず その内容に無とん着で いきおい「かけ武者」扱いですまされてしまつている。一般の人たちにとって どこそこの地質は分つていて当り前であり 新しい有力な資源がみつかつて当然のことなのである。



そして彼らは自然の神秘(この場合化石に関する)を求めて博物館通い

自然を相手とし 自然の神秘～古くさいことばではあるが ～をとときあかす仕事は全く魅

力的であり 若い人たちをひきつけるにやぶさかでない。 かつて私もその仕事に魅せられた一人のお客であった。

いまから30年余り前に ちょうど7年制の高等学校で気ままに振舞えたのも手伝つて 土曜から月曜にかけて 講義をさぼつて山歩きをしたものである。主として最初は秩父・八ヶ岳・南アルプスの山々であったが やがて間もなく「山の魅力」が私をとりこにし 次いで「その神秘めいた不可思議な山」が地形 岩肌 景観に興味をそそつて地質学の門をたたかせるに手間をとらせなかつたというわけである。以来 標札のでていない岩に しかもちゃんと名がつけられているのに驚き 出そうもない化石を追つて 農家の裏庭で日ねもすトンカチトンカチ叩きやをやり 野帳の余白に好きな山の絵を書いて 細かに崩けたビスケットを思わせる けつ岩の山で それなりに悔いのない青春の追想にふけたものである。ビスケットの山はやがて 大学を出るにおよんで 黄土にすそを包まれた中国大陸の裸岩の山となり 三転して帰国後 日本の宿命的なといえる デルタ地帯に移り変つてはきたが この間 果たしてほんとうに青春の感激を味わいつづけただろうか。

ふつうの小説家は概して山岳を舞台にするのが下手だという。新田次郎のような山岳気象出身の人は別として たしかに山を知らない人に 山を舞台にする真実味あふれた小説は書けないのが当り前であろう。しかし普通の小説家でもよく次のようなことをフィクションの一つに使っているのにお目にかかる。つまり若い登山家が恋愛のさだなかにあつて 山仲間の誘いに対し 恋人との約束を守るべきか 誘いに応ずるべきかの決着にせまられる。この場合



次いで彼ら geologist は自然の神秘(この絵の場合も化石)のとりことなる

恋人と会う方に話をもっていくならばそれは もっともチャチな大衆小説であり 一たん山行に同意させ その山に恋人を誘うストーリーをつくるなら それは 凡俗な山岳小説となるのである。ところで問題は geologist つまり日本語でいえば「地質学」の場合であるが 地質学の場合には どうも余りに「非小説的」にならざるをえない。要するに色気のなさ過ぎる仕事だということもできよう。とにかくご存知のように 地質学は本来その仕事が野外とくに山野をかけめぐることにあるので とかく家庭生活を二分され勝ちであり……GSニュース編集長注:トレーラハウスで せめてサーカスマがいの夫婦生活でも送れるようになれば また別のはなしであろうけれど…… 家族とわかれわかれに生活する時間がすこぶる長い。科学研究の仲間のうちでも こうした生活状態で過す部分が長い部類に属しよう。私自身 華北在職中 兵隊には一日もとられなかったのに 7年間の約半分は 妻とのやむをえざる別居生活をせざるをえなかったのである。もっともその代償として……ざっくばらんにいえば…… 帰国後そのことで博士論文をえ 華北 蒙疆の地下水についての中共国家の顧問的招待を受けようとさえする機会に遭遇したのではあるが……

とにかくこうした(いまにして思えば)個人

の家庭生活にひびを入れるような さまざまな仕草が 恋愛進行中から約束ずけられ宿命ずけられているのが きわめて一般的だと……少なくともまれにみられる例ではないということをも銘記していただきたい。だからこそ上に述べたような小説のフィクションにも特別な抵抗を感じないのであるといえよう。ともあれ人はしばしば そうした青春に迷える小羊を 山気違いといい 変りものだという。もっともこれもいまにして思えばで 近ごろの若い人の中では すこぶる要領のよい取引が行なわれていて 大衆小説顔負けの両手使いが 妙手を限りなくあみだしているようであるが 私たち戦前派にしてみれば そうした近代的妙手はつゆつゆ知らず 正直に下界の恋愛と 山に対する執念との板ばさみで悩まされ とどのつまりは「氣負って、山にかけたのである。そして後半には 戦争という嫌悪すべき事情があったにせよ 山の上において 下界においてきた青春に 必ずしも無関心ではおれなかったのである。氣負い立って山に入ったものの やはりそこに一抹の悔いを感じないわけにいかなかったと 率直に白状しなければならぬ。

昭和16年に私の単行本としての処女作『野帖余白』が山岳図書専門の朋文堂から出版されたが これはいまにしておもえば 当時の私の失われていく青春への一つの抵抗が書かせたものと思う。地質の野外研究のつれづれなるままに書きつづったいくつかの文章は おかげで知友先輩にたいへん好評をえたのであるが その青春への心のかけ橋が 地質学を「ぢしつがく」と呼ぶような人たちをも含めた第三者の心の琴線にふれえたのではないかと思う。その野帖余白の終りに近く 晩秋のしおり



やがて彼らは geologist 特有の三味境に入り込む
その青春は隠化植物のはなつ猛烈な熱気にしばしば去勢されたようにさえなってしまう

として 南佐久素描という一章がある。
その最後に
ああ憐れなり 一介の旅人の私 今夜一夜の泊をいづこにとるべきか——
……だが然し また新たなる期待がある。 柏の葉づれする晩秋の念場カ原 野辺山カ原を歩く機会をもちえたことに 楽しい明日への期待

がかけられる。
という文章がある。当時 陶醉していた尾崎喜八先生の山の絵本流に書き流しているのであるが 八カ岳の斜面地形の研究途中 浅間の噴煙が突如として立ちのぼるのを望見しながら 金鉱探しの山師に間違えられたあと たそがれせまるころには 人の世恋しさをおぼえ その一抹の哀愁を「明日への期待」でもっばら打ち消そうと努力している心の動きを たしかに描こうとしていたのである。 いずれにしても いまにしておもえば……ということにはなりそうであるが 山にかける地質やの青春 果たして幸多きや？ と疑ってみなければならぬようである。
(筆者は地質部長)

読者の質問箱

地質を判読する一手段として 空中写真を使用したいと思いますが その購入に関する手続き および注意事項を教えてください (某鉱業会社地質課)

【こたえ】

- 空中写真を一般に販売しているのは
- 日本測量協会 (東京都新宿区戸山町37 Tel. 341-2047)
 - 日本林業技術協会 (東京都千代田区六番町7 Tel. 331-4214)

の2つがおもなもので ほかに都道府県林務関係や航空会社などがあります。ここでは日本測量協会と日本林業技術協会を取り扱う空中写真について述べてみよう
日本測量協会を取り扱う空中写真は 建設省国土地理院発行のもので 原板縮尺の種類は4万分の1 2万分の1 1万分の1の三種で 日本全体そろっているのは原板縮尺4万分の1のものだけで 他は撮影されている所とない所とがあります。
日本林業技術協会を取り扱う空中写真は 林野庁撮影のもので 原板縮尺2万分の1の一種だけで 国有林地区を対象としたもので その地区の中には撮影されていない所もあります。 購入申込みに関する要領の大意を次に示しますと

1. 日本測量協会の場合

購入申込書の名称	空中写真購入申込書
提出先	日本測量協会長
送付先	日本測量協会空中写真部 東京都新宿区戸山町37 Tel (341) 2047

おもな記入事項	利用の目的 利用の地域 写真の原縮尺 種類および枚数
貼付地形図	必要範囲を明示した5万分の1地形図
空中写真の1枚の定価	おもなもの
密着焼印画	タテ24cm×ヨコ24cm 100円
2倍引伸印画	〃 48 × 〃 48 450円
密着陽画原板	〃 24 × 〃 25 750円
購入	申込後20日位で購入の通知が届き 現金引換の上購入できる 時期により通知が2カ月くらいおくれることもあります

2. 日本林業技術協会の場合

購入申込書の名称	複製写真配布申請書
提出先	林野庁指導部計画課長
送付先	林野庁指導部計画課長 東京都千代田区霞ヶ関2-1
おもな記入事項	目的・利用の方法・必要とする地域・写真の縮尺および枚数 配布希望年月日
貼付地形図	必要とする地域記入の5万分の1の地形図
空中写真の1枚の定価	おもなもの
密着焼印画	105円
2倍引伸印画	450円
ポジフィルム焼付(図化用)	450円
購入	申込後20日ぐらいて購入通知が届き 現金引換の上購入できる

空中写真を複製するときや空中写真を利用して測量または図化するときなど すべて建設省国土地理院に申請しなければなりません。 そのほか 空中写真の購入についての詳細は 直接日本測量協会または日本林業技術協会へ お問合せ下さい。(地質相談所 宮本技官)